

## 川崎病不全型に関する研究〔Ⅱ〕

(分担研究：川崎病サーベランスとその解析に関する研究)

研究協力者：尾内善四郎 1)

共同研究者：坂田耕一 1)、古庄巻師 2)、加藤裕久 3)

柳川 洋 4)、原田研介 5)

要旨：18施設の協力により、确实A 1085例、确实B 9例、容疑81例を解析した。确实Bと容疑群の主要症状の発現率は确实Bの口腔口唇所見以外は低率であった。容疑群において4症状、3症状、2症状陽性例は61%、31%、8%であった。そのうち3症状、2症状陽性例でBCG部発赤は38%、57%に認めた。确实A、容疑群に比べ确实Bの川崎病診断決定病日は最も遅く、入院期間は最も長かったが、心血管後遺症は高くはなかった。一方容疑例は全体に軽症であったが、心炎による死亡を1例認めた。

見出し語：川崎病、不全型、後遺症

研究目的：厚生省川崎病研究班のプロジェクト課題の一つとしてある不全型の臨床像および予後に関する研究が挙げられている。加藤班において第12回川崎病全国調査に基づいた予備調査を行ったが、引き続き原田班においては不全型の臨床像および予後に関し、二次調査により詳細な検討を行った。

方法：班員・班友の施設を対象に、第13回川崎病全国調査(平成5年、6年の2年間の発症例)に基づいて、确实A、确实B、容疑別分類で症状、検査、心血管所見についてアン

ケート調査を行った(表1)。

結果：1)協力施設 班員・班友22施設のうち18施設から回答を得た。2)対象患者数 确实A 1085例、确实B 9例、容疑81例、計 1175例であった。3)主要症状(表2) 37.5°C以上を発熱したが、确实Bは全例1病日から陽性、容疑例では81例中5例に関しては記載漏れで、1例は発熱を認めず、また2例は各々4または5病日から発熱した。有熱期間に関しては容疑群は短く、确实Bとの間に有意差を認めた。

---

1)京都府立医科大学小児疾患研究施設内科部門 Div.of Pediatr.,Children's Res.Hosp., Kyoto Pref.Univ.of Med. 2)京都大学小児科 Dep.of Pediatr.,Kyoto Univ. 3)久留米大学小児科 Dep.of Pediatr.,Kurume Univ. 4)自治医科大学公衆衛生学 Dep.of Public Health, Jichi Med.School.5)日本大学小児科 Dep.of Pediatr.,Nihon Univ.

その他の主要症状では、确实Bの口唇、口腔所見が100%で、容疑群との間に有意差を認めた。発疹、眼球充血、口唇口腔所見、リンパ節腫張および手足の硬性浮腫に関しては、确实Bの口腔口唇所見以外は全て低頻度であった。容疑群について6主要症状中、4症状、3症状、2症状、の陽性例はそれぞれ49例(61%)、26例(31%)、7例(8%)であった。4) その他の症状、确实Bでは下痢1例、BCG部の発赤4例(44.4%)、関節所見1例を認めた。一方容疑群では心炎3例(3.7%)で、その内の1例は死亡した。下痢5例、BCG29例(35.8%)、髄膜炎1例であった。BCG部発赤例は3主要症状陽性26例中10例(38%)、2主要症状陽性7例中4例(57%)であり、川崎病の診断に有用と考えた。5) 症状の特異的経過 确实A(n=848)は $5.9 \pm 2.4$ 病日(2~30病日)、确实B(n=9)は $7.8 \pm 4.1$ 病日(3~14病日)、容疑群(n=76)は $6.0 \pm 2.1$ 病日(2~14病日)であった。确实Bは确实Aと容疑群との間でそれぞれ、 $P=0.017$ 、 $0.032$ の有意差を以て、最も遅かった。确实Bの診断の遅れている理由は不明だが、症状の出揃うのに日数を要するのかもしれない(非定型例)。7) 検査所見(表3) 容疑群のCRP値が他の群と比較し、有意に低値であった。8) 入院期間(表4) 容疑群では1W以内の入院が他の群に比べ有意に多かった。一方、1カ月~2カ月未満の入院に関しては、确实Bが有意に多かった。8) 心血管所見(表5) 确实Bで急性期冠動脈拡大を認めなかった例が含まれているが、これはエコー輝度亢進が陽性であった。确实Aでは冠動脈拡大を認めた152例中65例(43%)

が2病日後も残存したが、确实Bでは13%、容疑群では40%であった。弁障害に関しても、确实Bは他群に比較して頻度は特に高くなかった。容疑例で急性期冠動脈拡大を示した5症例主要症状に関しては、発疹および眼球結膜充血の陽性頻度はそれぞれ80%であった。一方、5日以上の発熱は1例に過ぎなかった。

まとめ：1. 确实Bは川崎病診断決定が遅れ、また長期の入院を要したが心血管後遺症の頻度は确实Aや容疑例と比べ高くはなかった。2. 容疑例は全体的に軽症で、経過も短かったが、中には死亡例を認めることから早期診断と積極的な治療を要する。

[表 1]

川崎病(確実A・B・容疑)調査票

第12-13回全国調査から疑陽性の症例を抽出しました。

送先 京都市上京区河原町広小路堀井町465  
602 京都府立医科大学付属小児病態研究施設  
内科部門 尾内室404  
TEL 075-251-5830, FAX 075-251-5833

確実Aは記入不要です

患者氏名	診断	主要症状 (発熱(病日) ~ ) 2.発疹 3.眼球結膜充血 4.口唇発赤 5.頸部リンパ節腫脹 6.急性浮腫・皮膚落屑 7.主要症状の特異的経過	その他の症状 1.心炎 2.下痢 3.痲痺性イレウス 4.胆嚢炎 5.BCG接種部位変化 6.関節所見 7.無菌性髄膜炎	診断決定 病日 訂正	記入 ↓		入院期間 1. ~1週 2. ~2週 3. ~4週 4. ~2月 5. 2月~	心臓所見 1.冠動脈変化なし 2.冠動脈壁エコー増厚亢進 3.冠動脈拡張性病変 4.有意僧帽弁逆流 5.有意大動脈弁逆流 その他	急性期 回復期 回復月数	緊急検査 Hb WBC CRP 総Chol 検査所見の特異的経過	最高値 最低値 Alb Pits HDL-Chol mg/dl	診断時の検査所見 (最高または最低)	急性期 回復期 回復月数	緊急検査 γ-GTP 製品名 γ-GTP その他	急性期追加治療 γ-GTP 製品名 γ-GTP その他	経過 1.投薬中 2.経過観察中 3. 4. 5.放置
					記入 ↓	記入 ↓										
		1.発熱(病日) ~ ) 2.発疹 3.眼球結膜充血 4.口唇発赤 5.頸部リンパ節腫脹 6.急性浮腫・皮膚落屑 7.主要症状の特異的経過	1.心炎 2.下痢 3.痲痺性イレウス 4.胆嚢炎 5.BCG接種部位変化 6.関節所見 7.無菌性髄膜炎	病日 訂正	最高値 最低値 Alb Pits HDL-Chol mg/dl	最高値 最低値 Alb Pits HDL-Chol mg/dl	1. ~1週 2. ~2週 3. ~4週 4. ~2月 5. 2月~	1.冠動脈変化なし 2.冠動脈壁エコー増厚亢進 3.冠動脈拡張性病変 4.有意僧帽弁逆流 5.有意大動脈弁逆流 その他	急性期 回復期 回復月数	緊急検査 Hb WBC CRP 総Chol 検査所見の特異的経過	最高値 最低値 Alb Pits HDL-Chol mg/dl	診断時の検査所見 (最高または最低)	急性期 回復期 回復月数	緊急検査 γ-GTP 製品名 γ-GTP その他	急性期追加治療 γ-GTP 製品名 γ-GTP その他	経過 1.投薬中 2.経過観察中 3. 4. 5.放置
		1.発熱(病日) ~ ) 2.発疹 3.眼球結膜充血 4.口唇発赤 5.頸部リンパ節腫脹 6.急性浮腫・皮膚落屑 7.主要症状の特異的経過	1.心炎 2.下痢 3.痲痺性イレウス 4.胆嚢炎 5.BCG接種部位変化 6.関節所見 7.無菌性髄膜炎	病日 訂正	最高値 最低値 Alb Pits HDL-Chol mg/dl	最高値 最低値 Alb Pits HDL-Chol mg/dl	1. ~1週 2. ~2週 3. ~4週 4. ~2月 5. 2月~	1.冠動脈変化なし 2.冠動脈壁エコー増厚亢進 3.冠動脈拡張性病変 4.有意僧帽弁逆流 5.有意大動脈弁逆流 その他	急性期 回復期 回復月数	緊急検査 Hb WBC CRP 総Chol 検査所見の特異的経過	最高値 最低値 Alb Pits HDL-Chol mg/dl	診断時の検査所見 (最高または最低)	急性期 回復期 回復月数	緊急検査 γ-GTP 製品名 γ-GTP その他	急性期追加治療 γ-GTP 製品名 γ-GTP その他	経過 1.投薬中 2.経過観察中 3. 4. 5.放置
		1.発熱(病日) ~ ) 2.発疹 3.眼球結膜充血 4.口唇発赤 5.頸部リンパ節腫脹 6.急性浮腫・皮膚落屑 7.主要症状の特異的経過	1.心炎 2.下痢 3.痲痺性イレウス 4.胆嚢炎 5.BCG接種部位変化 6.関節所見 7.無菌性髄膜炎	病日 訂正	最高値 最低値 Alb Pits HDL-Chol mg/dl	最高値 最低値 Alb Pits HDL-Chol mg/dl	1. ~1週 2. ~2週 3. ~4週 4. ~2月 5. 2月~	1.冠動脈変化なし 2.冠動脈壁エコー増厚亢進 3.冠動脈拡張性病変 4.有意僧帽弁逆流 5.有意大動脈弁逆流 その他	急性期 回復期 回復月数	緊急検査 Hb WBC CRP 総Chol 検査所見の特異的経過	最高値 最低値 Alb Pits HDL-Chol mg/dl	診断時の検査所見 (最高または最低)	急性期 回復期 回復月数	緊急検査 γ-GTP 製品名 γ-GTP その他	急性期追加治療 γ-GTP 製品名 γ-GTP その他	経過 1.投薬中 2.経過観察中 3. 4. 5.放置

【表 2】 主要症状	确实 B	容 疑	P value	*下熱病日 0は発熱なし ** unpaired t-test *** Fisher's exact test
発熱開始病日 (D)	1.0±0	1±0.6 (1~5)		
下熱病日	8.0±2.8 (4~12)	5±2.4 (0~13)*		
有熱病日	8.0±2.8 (4~12)	5±2.3 (0~13)*	0.005**	
発疹 (%)	55.6	66.7		
眼球充血	77.8	81.5		
口唇口腔所見	100.0	55.6	0.01***	
リンパ節膨張	55.6	48.1		
手足の硬性浮腫	44.4	43.2		

【表 3】 検査所見	确实 A (n=506)	确实 B (n=9)	容 疑 (n=80)	A-B	A-容疑	B-容疑	P value*
max.WBC	16039±54036 (34800~5100)	16133±7179 (33900~8700)	14466±6087 (35700~5100)				
max.CRP	11.0±6.7 (40.8~0)	11.9±7.6 (27.7~2.1)	7.3±6.5 (32.0~0)		0.015	0.051	
max.Tc	(n=8) 142±32.5 (192~99)	(n=44) 164±62 (381~3)					
min.Alb	(n=8) 3.3±0.6 (4.2~2.7)	(n=69) 4.4±5.8 (4.9~2.3)					
min.Plts	(n=8) 32.5±11.8 (52.2~16.2)	(n=77) 35.6±13.6 (57.6~13.6)					

\* unpaired t-test

【表 4】 入院期間	确实 A	确实 B	容 疑	A-B	A-容疑	B-容疑	P value*
~1W	7.4%	0	22.2		<0.001		
~2W	33.1	11.1	35.8				
~4W	46.5	44.4	32.1				
~2M	6.1	44.4	1.2	0.0015	0.081	0.002	
2M~	1.0	0	0				* unpaired t-test

【表 5】 心血管所見

a) 急性期	确实 A	确实 B	容 疑	A-B	A-容疑	B-容疑	P value*
冠動脈拡大	14.0%	88.9	6.2	<0.0001		<0.0001	
有意MR	3.2	0	2.5				* unpaired t-test
有意AR	0.1	0	0				
b) 回復後残存	确实 A	确实 B	容 疑	A-B	A-容疑	B-容疑	P value*
冠動脈変化	6.0	11.1	2.5				
MR	0.5	0	0				* unpaired t-test
AR	0.1	0	0				



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要旨: 18 施設の協力により、确实 A1085 例、确实 B9 例、容疑 81 例を解析した。确实 B と容疑群の主要症状の発現率は确实 B の口腔口唇所見以外は低率であった。容疑群において 4 症状、3 症状、2 症状陽性例は 61%、31%、8%であった。そのうち 3 症状、2 症状陽性例で BCG 部発赤は 38%、57%に認めた。确实 A、容疑群に比べ确实 B の川崎病診断決定病日は最も遅く、入院期間は最も長かったが、心血管後遺症は高くはなかった。一方容疑例は全体に軽症であったが、心炎による死亡を 1 例認めた。